

## 研究所年報 巻頭の言葉

「和漢薬研究所年報」は和漢薬研究所全体の年間の研究成果と活動状況を示す記録である。

昭和50年に第1巻が発刊されたので、平成15年で第30巻となった。研究所の創設にあられた先生方をはじめとして、どのように和漢薬研究が展開されてきたかは年報を通覧するとよく理解できる。

本研究所の歴史については、設立40周年を迎えて作成した記念誌に記載されているので参照していただくとして、平成15年が研究所にとって激動の1年であったことを記しておきたい。平成14年9月、科学技術・学術審議会の学術分科会の下に国立大学附置研究所等特別委員会が設置され、国立大学を法人化するにあたっては附置研究所のありかたを見直す必要があるとされた。種々審議の結果、常勤の研究員が30名以下の研究所については統廃合や再編を考えることの結論が出された。後学のためにその存続を判断する基準を記録しておく、研究所の目的の重要性、研究活動の全国的な意味とCOE性、組織性（継続的に機能を発揮するに十分な一定の人的規模を有するか）等である。但し、これらは研究所の役割・機能の重要性、研究活動の状況及び当該研究分野の今後の見通し等にも配慮して弾力的に取り扱うべきであるとされた。この課題に対処するために和漢薬研究所では、これまでの研究活動実績と外部評価の結果を主張すると共に、本学構成員をはじめとして諸先輩や富山県等の多くの方々の御支援をいただいた。その結果、存続は可、今後の研究活動や改革の様子を暫く見守るという結論を得た。

現在、研究所は個々の研究活動に加え、大部門制に移行したことにより部門内だけでなく、部門をこえたプロジェクト研究の立ち上げを図っている。また、富山県が主導する「とやま医薬バイオクラスター研究事業」課題の一つ「漢方方剤テーラード治療法の開発」研究、富山県薬業連合会と共同の「富山オリジナルブランド配置薬の開発研究」、21世紀COEプログラム「東洋の知に立脚した個の医療の創生」において基礎研究部分を担当している。また、日本学術振興会のタイ国との学術交流事業「天然薬物」の拠点校としての研究活動が続いており、所帯は小さくとも活発である。

来年4月には国立大学の法人化を控えており、研究所の中期計画を立案中である。落ち着いた研究できる雰囲気ではない側面もあるが、このような時期にこそ地道に研究活動を続ける努力が必要である。

平成15年12月

和漢薬研究所長 渡邊裕司